

佐倉久隆氏から届いた故父上・晴夫さんと増田清一隊長の写真

4 組 大野正夫

先に、佐倉久隆氏の父上と増田清一隊長のことを書きましたが、8 月に入って、佐倉氏から「添付ファイルで増田清一隊長と思われる写真をアルバムから見つけた」と写真が届きました。私が執筆した「大地の伝言」の中の増田清一部隊長の顔写真と一致すると書かれており、隊長は中央で帽子をかぶっています。父上は右から 3 人目と記され、慰労会の時の写真と思われるそうです。

父上は東京音楽学校の弦楽器学科を卒業された方です。私の想像ですが、兵士の皆さんが持っているものは、テグス糸などで作った楽器ではないかと思います。先に掲載した手紙に、「部隊の中で合唱の練習をしており、慰労会などで歌うのは、娯楽のないところなので喜ばれる」と書かれていました。この写真は、部隊の写真班員が撮影して、皆に配布したものを、絵手紙と一緒に同封されたと推察しています。

ここで注目するのは、この部隊です。2632 部隊は戦闘部隊ではなく、野戦兵器部隊で兵器、砲弾の管理、修理、保存をする部隊で、戦時には戦闘の後方部隊です。そこで中年と思われる方が多く写真に写っています。増田部隊長の方針と思いますが、部隊の中に合唱団を作り、しかも合唱曲「渚」のような歌を歌っていたことは驚きです。「南国土佐を後にして」の歌は、高知の陸軍 44 聯隊のなかで作られ、兵士が輪になって歌っていたものです。兵士達は軍歌ばかりを歌っていたのではないことがわかります。

この写真のもう一つ、興味があるのは、兵士が主役で、中央に隊長は後ろに立っていることと、士官が両方の袖にいることです。部隊のなかで、和やかな仲間意識であったように思います。

増田清一大佐は砲兵部隊を指揮しておりました。アッツ島への部隊を潜水艦で送る任務を海軍と作戦を練って行い完了しました。アッツ島で玉砕した部隊長と士官学校で同期だったそうです。

この任務を終えて、満洲に編成された 2632 部隊を指揮しました。ソ連軍侵攻を予想して編成された部隊です。しかも 1945 年春には、ソ連軍が牡丹江を目指してくると思われる最前線に編成された部隊に少将に昇格移動しました。彼は牡丹江防衛線構築作戦を練り、終戦時に自決せず捕虜になりました。増田隊長の妻は、その報を聞いて「自決

してほしかった」とつぶやいたそうです。彼は「隊長が自決すれば、部隊が乱れえる」と思ったと思います。甘んじてシベリア抑留生活をしました。シベリア抑留では、幹部軍人は一般兵士とは別の生活をしたそうですが、増田隊長は兵士と共に同じ部屋で生活をしたそうです。シベリアから持ちかえたのは、腕時計と金殊勲章・将官章だけだったそうです。勲章などは、ソ連兵は何かのバッチと思ったと思います。シベリア抑留から帰国して、職には就かず、小学校先生、増田昭一先生の給与だけで生活して56歳で逝去しました。シベリア抑留が辛かったのでしょう。多くの軍人幹部は第2の人生を歩んでのですが、増田清一少将は、多くを語らず日記を書くことが日課だったそうです。興味深いのは、野菜やコメなど買ったものを詳細に記述していたそうです。「00 女史が、今晚泊まる」とも書いてあったそうです。父親が亡くなって、日記を読んだ増田先生は「よく記録してくれた!」と、思ったそうです。



(完)

(编者コメント)

みなさんが手にしているのはあやつり人形の糸のようです。足元に小さな人形が立っているのが分かります。